

# 台兒庄作戦の概観

## Outline of the Taierzhuang Strategy

姜 克 實 JIANG, Keshi

### はじめに

旧日本軍は、1938年3月23日から同4月7日まで、16日にわたって山東南部の町台兒庄の周辺で行われたこの作戦を、台兒庄攻略戦、台兒庄の戦いと呼称し、「第一期南部山東剿滅作戦」における作戦の一つとして位置させる。対して中国では、「台兒庄大戦」「台兒庄会戦」「台兒庄大捷」の呼び名を使い、戦闘から戦役、会戦へと、規模を拡大して解釈し、中国軍が善戦したとされるほかの三つの戦闘——1.「池淮の防衛戦」（1月下旬から2月上旬）、2.「臨沂の防衛戦」（2月下旬から3月下旬）、3.「滕県の防衛戦」（3月16-18日）——を組入れ、台兒庄の戦いを中心に、中国軍が抗戦して勝利に至る「台兒庄大戦史観」を作り出している。局部の「戦闘」と「会戦、大戦」の見方の違いで、その期間範囲も地域範囲も大きく違ってくる。その意味と問題点は別論にして、本論は、使用する旧日本軍史料の性質上、考察の対象を台兒庄周辺における16日間の戦いのみに限定して、データを中心にリアルに戦闘の記録を還元することが目的である。

### 1. 台兒庄作戦の参加部隊と武器装備

#### 1. 1. 瀨谷支隊の「軍隊区分」

この戦闘に参加した日本軍の主役は、北支那方面軍の第二軍第十師団（姫路、師団長磯谷廉介中将）歩兵第三十三旅団（岡山）を中心とする瀨谷支隊（旅団長瀨谷啓少将）で、兵力は歩兵の二個聯隊（第十聯隊〔岡山〕、第六十三聯隊〔松江〕）を始め、砲兵、機甲部隊など各種他兵科の部隊も配属されている。

瀨谷支隊の編成全容について、歩兵第十聯隊の戦闘詳報に台兒庄の戦いが始まった、1938年3月25日時点での「瀨谷支隊の軍隊区分」（＝作戦目的における編成）の記録があるので、以下に録しておく<sup>1</sup>。

#### 1. 台兒庄攻略部隊 長 福栄歩兵大佐

・歩兵第六十三聯隊（第一大隊〔第二中隊欠〕欠）・独立軽装甲車第十中隊・支那駐屯兵团  
臨時編成戦車隊

<sup>1</sup> 「軍隊区分」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11111170900、No.1663-1667 歩兵第十聯隊戦闘詳報第10～12。番号は分かりやすいように、引用者がつけたもの。

- ・野砲兵第十聯隊第一大隊（一中隊欠）・野戦重砲兵第二聯隊（第二大隊、聯隊段列半部欠）
- ・支那駐屯軍重砲第三大隊ノ一小隊・工兵第十聯隊第一中隊ノ一小隊・旅団無線一基、師団無線一基・衛生隊（三分ノ二欠）
- 2. 歩兵第六十三聯隊第一大隊
  - ・歩兵第六十三聯隊第一大隊（第二中隊欠）・独立機関銃第十大隊第三中隊・工兵第十聯隊第一中隊二分隊・旅団無線一基・第一野戦病院ノ一部
- 3. 歩兵第十聯隊
  - ・歩兵第十聯隊（第三、四中隊 第三大隊欠）・独立機関銃第十大隊（第三中隊欠）・工兵第十聯隊第一中隊（二小隊及三分隊欠）
- 4. 砲兵隊 長 谷口砲兵中佐
  - ・野砲兵第十聯隊（第一大隊第六中隊第三大隊第十中隊欠）・臨時編成山砲兵中隊
  - ・支那駐屯重砲第三大隊（一小隊欠）
- 5. 予備隊 ・歩兵第十聯隊第四中隊・独立軽装甲車第十二中隊
- 6. 支隊直轄部隊 ・騎兵一分隊・野戦重砲兵第一旅団司令部・旅団無線二基・師団通信有線一小隊・師団無線二分隊・軍無線一分隊・衛生隊三分一（一部欠）・第一野戦病院（半部欠）
- 7. 韓莊守備隊 長 岡歩兵少佐
  - ・歩兵第十第三大隊（第九中隊欠）・野砲兵第六中隊・工兵第十聯隊第一中隊ノ一小隊・旅団無線一基・衛生隊ノ一部
- 8. 鉄道警備隊臨城守備隊
  - ・歩兵第十聯隊第三、第九中隊・臨時野砲兵中隊・第一野戦病院半部
- 9. 支隊輜重兵隊
  - ・瀬谷支隊輜重兵隊（三個中隊 C11111033100 地図より確認）
  - ・野戦重砲兵旅団輜重一中隊・兵站自動車第十五中隊 第五十二中隊。

以上は、瀬谷支隊のほぼ全部の編成を網羅しているが、戦闘部署の背景を簡単に説明すると、1の部分は台兒庄に投入された攻略部隊の編成リスト。2-6の部分は、瀬谷支隊の主力で、棗莊とその東の郭里集に集結して、郭里集附近の戦闘（3月24日-29日）に投入する予定の部隊である。7と8は、瀬谷支隊の支配範囲内の津浦線にある二つの重要な拠点——最南端の韓莊と、津浦線と臨棗鉄道交差点の臨城の守備隊である。9の輜重兵隊は瀬谷支隊の全体を支える後方輸送部隊である。本論の内容と直接関わっているのは、1-6の部分である。

以上を総合すると、台兒庄の戦いの最大時に、歩兵十九個中隊、砲兵六個中隊、重機関銃七個中隊、独立砲兵十二個中隊が投入され、人員10,417名と馬3,263匹であった。

武器装備として、合計軽重機関銃204挺（その中重機関銃54挺、車載軽機関銃46挺を含む）、各種

火砲78門（その中に歩兵聯隊火砲25門、戦車砲7門を含む）、戦闘車輛46輛（内訳戦車7輛、軽装甲車39輛）が台兒庄の主戦場に投入されていた。

2. 戦闘経過（粗筋）

2. 1. 南下作戦における瀨谷支隊全体の動向

2. 1. 1. 臨城を陥落

以上に挙げた兵員、兵器の統計数字はあくまでも瀨谷支隊の作戦最大時に投入した兵力総数であり、すべて15日間を通して戦闘に参加したわけではない。台兒庄附近の戦闘が行われている間、瀨谷支隊は西の夏鎮、臨城から東の棗莊、郭里集まで、西南の韓莊から東南の台兒庄まで、東西約55キロ、南北約40キロの広い地域にわたって展開しており、西側に走る津浦鉄道線の拠点である韓莊や臨城にも合計三個守備隊、歩兵五個中隊、砲兵二個中隊が置かれていた。また支隊の主力（歩兵三個大隊、砲兵二個大隊）も、3月24日～29日、棗莊西の郭里集附近で湯恩伯軍を相手に作戦を行っており、全員が台兒庄附近の戦場に入ったのは、郭里集の作戦終了後の3月30日以降であった。この間の瀨谷支隊の動きを簡単に説明しよう。

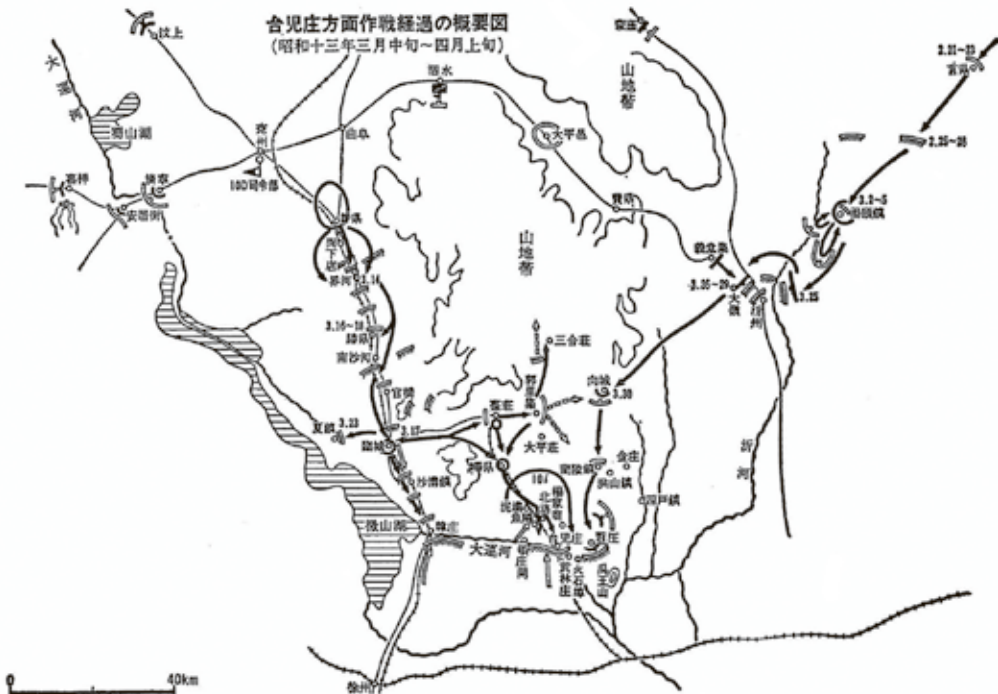


図1 台兒庄方面作戦経過要図 『戦史叢書 支那事変陸軍作戦』2、30頁より

第十師団瀨谷支隊が南下作戦（南部山東剿滅作戦）を開始したのは、1938年3月14日朝であった。3月13日、第二軍司令官は「第十師団に対し津浦線方面大運河以北の敵を撃破すべきを、第五師団

に対し一部を以て速かに沂州を攻略し引続き嶧県方面に進出して第十師団の作戦を容易ならしむべき」と南下攻撃命令<sup>2</sup>を下し、津浦線から南進を担当する第十師団瀨谷支隊は、3月14日、歩兵第十聯隊と歩兵第六十三聯隊を以て鄒県南両下店一線から南下し始め、四川軍（国民党第二十二集團軍約20,000名）を席卷しつつ、14日界河を陥落し、16-18日、津浦線の重要拠点である滕県を陥落させた（第十聯隊）。と同時に歩兵第六十三聯隊をもって快速挺進隊と追撃隊を組織して一路南進し続け、3月17日午後5時頃、第六十三聯隊から「敵ノ抵抗ヲ排除シテ臨城ヲ占領セリ」と報告を受けた<sup>3</sup>。滕県南の臨城は、四川軍の司令部所在地で、当初、瀨谷支隊が目指した目的地であった。18日午前9時、聯隊長福栄真平は臨城で「津浦沿線韓莊及臨棗——台棗鉄道沿線嶧県ニ追撃隊ヲ派遣スヘキ」の支隊命令を受け<sup>4</sup>、兵を分け南方大運河北岸の韓莊（臨城南25キロ）に右追撃隊（第一大隊、中川廉少佐）を進め、東の嶧県（臨城東30キロ）方向に左追撃隊（第二大隊、安永興八中佐）を派遣し、3月20日、嶧県と韓莊を確保した。こうして、一週間足らずで、瀨谷支隊は南下作戦最初の「津浦線方面大運河北の敵を撃破すべき」作戦目標に達したのである。

## 2. 1. 2. 台兒庄派遣部隊と沂州支隊

一方、第十師団瀨谷支隊側の快進と反対に、第五師団坂本支隊は沂州地域で苦戦し、計画通り、両師団の合流予定地である嶧県に進出できなかった。20日、第十師団司令部は瀨谷支隊に「韓莊、台兒庄運河ノ線ヲ確保シ臨城、嶧県ヲ警備スルト共ニナルヘク多クノ兵力ヲ以テ沂州方面ニ突進シ第五師団ノ戦闘ニ協力」すべきと命令した。この命令を受け瀨谷支隊は歩兵第六十三聯隊を嶧県に前進させ、先着した左追撃隊を掌握し台兒庄（南東33キロ）及び蘭陵鎮（東28キロ）方向に搜索前進の態勢を整えた<sup>5</sup>。台兒庄は（韓莊東40キロ）大運河線北部にある商業町で、運河の水路で西の韓莊に連繋し、北の中興会社の炭鉞町棗莊の間では、42キロに及ぶ台棗鉄道で結ばれていた。韓莊に繋がる大運河線は、「南部山東剿滅作戦」と命名したこの作戦のボーダーラインでもあった。

瀨谷支隊長は、台棗鉄道沿線および運河線に位置する台兒庄を確保するため、22日、歩兵一個大隊、野砲兵一個中隊となる「台兒庄派遣部隊」を編成し、翌23日、台兒庄に前進させた<sup>6</sup>。これは本論の主題たる「台兒庄作戦」の幕開けである。

この時、滕県攻略戦で遅れをとった歩兵第十聯隊は、3月22日官路口（臨城北8キロ）にて集結

<sup>2</sup> 「北支方面作戦記録 第1巻 2（2）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11111708200. 4/48 No. 818.

<sup>3</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11111252600. 20/59 No.779 歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦 闘詳報 昭和13年3月2日～昭和13年4月6日（2分冊の1）

<sup>4</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11111252600. 28/59 No.787.

<sup>5</sup> 前掲『戦史叢書 支那事変陸軍作戦〈2〉昭和十四年一月まで』、32頁。

<sup>6</sup> 『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR（アジア歴史資料センター）（以下では「JACAR（アジア歴史資料センター）の表記を略す」）Ref. C11111252700. No.827.

し終わり、23日第十砲兵聯隊、野戦重砲第二聯隊とともに「臨城西方」及び夏鎮（臨城西8キロ）附近の剿滅作戦を行った後、「瀨支作命第四〇号」を受け、第五師団坂本支隊の沂州攻略の戦闘に策応するため、歩兵第二大隊（加村旭少佐）と砲兵二個中隊、軽装甲車一個中隊、自動車一個中隊を基幹とする「沂州支隊」を編成し、24日正午、孔庄より沂州方向に前進させた<sup>7</sup>。

### 2. 1. 3. 郭里集付近の戦闘

一方、中国軍側の湯恩伯軍団の主力（110D・31D）はこの時、日本軍の台兒庄攻撃を牽制するため、棗莊東北方、北方の山地に集結し、棗莊炭鉱の奪取を目指していた。沂州攻撃策応のため出発した歩兵第十聯隊を基幹とする沂州支隊も、25日、出発してまもなく先遣隊の一部は棗莊東の郭里集で「約五千」名となる優勢な敵軍と遭遇し、激戦となった。この戦いで第五中隊第三小隊（石井直好少尉）は夜襲先の紀官庄で逆襲を受け34名が戦死し、全滅した<sup>8</sup>。この時、棗莊、郭里集北方の山地に中国軍の第四師、東方に第二十五師、東南方に第二師、第八十九師が控えており、瀨谷支隊の司令部が置かれた棗莊でも、中興会社の炭鉱が敵の包囲、攻撃を受けていた。同じ頃、南方台兒庄方面の戦況も緊迫化し、瀨谷は25日、まず歩兵第六十三聯隊主力を中心に「台兒庄攻略部隊」（長、福栄真平大佐）を編成、派遣する一方、支隊主力の歩兵三個大隊（沂州支隊を含む歩兵第十聯隊の二個大隊、歩兵第六十三聯隊第一大隊）と師団砲兵（10A）を嶧県、棗莊周辺に集結させ、北側の湯恩伯軍団に備えた。26日以降、郭里集で戦闘を行った中国軍は次第に後退して敵情が緩和したところ、瀨谷支隊は26日-27日、黄樓付近の戦闘をへて郭里集を制し、27-28日、郭里集北方山地の中国軍（約一師）に対して攻撃し（郭里集北方山地の戦闘）、29日戦闘を終了させた。この「郭里集附近の戦闘」において、第十聯隊と配属部隊人員4,343名、馬993匹が戦闘に参加し、死傷者138名、自動車9輛の損失を被った<sup>9</sup>。郭里集附近の戦闘で沂州策応の計画は白紙に戻り、戦闘が終了後3月30日、瀨谷支隊は主力を挙げて、台兒庄作戦に参加することになった。

### 2. 1. 4. 台兒庄への兵力三段階増強

以上のように、日本軍の台兒庄作戦は、参加部隊の規模から見れば、三段階に分けられる。

第一段階は、3月23日から26日までの間、「台兒庄派遣部隊」中心の戦いであった。投入した兵力は、歩兵第六十三聯隊の第二大隊、野砲兵一個中隊（改造38式野砲4門）の約1,500名余りで、25日以降、一部増援を受け人員2,300名、砲兵三個中隊（10門）の規模に増強された。作戦の指揮

<sup>7</sup> 「郭里集附近戦闘詳報（第十二号）」Ref.C11111170800、3-5/66 No.1590-1592 歩兵第十聯隊戦闘詳報、昭和12年8月～13年5月（防衛省防衛研究所）

<sup>8</sup> 『歩兵第十聯隊史』、同刊行会、1974年、537頁。

<sup>9</sup> 郭里集附近の戦闘について、「郭里集附近戦闘詳報」Ref.C11111170800、No.1588以下を参照。兵員数と死傷は、「戦闘詳報第十二号附表」Ref.C11111171000、1/3 No.1673歩兵第十聯隊戦闘詳報。この数字には、実際戦闘に参加した第六十三聯隊の第一大隊とその配属部隊の数を含まない。

者は、歩兵第六十三聯隊第二大隊長安永興八中佐である。

第二段階は、「台児庄攻略部隊」が派遣された3月27日から29日の期間で、作戦に参加する兵力は、歩兵第六十三聯隊第二、第三の二個大隊で、野戦重砲兵を含む砲兵六個中隊（15糎野戦重砲14門を含む砲22門）及び、戦車一個中隊、軽装甲車一個中隊で、総兵員数5,000名を超える。作戦の指揮官は、歩兵第六十三聯隊長福栄真平大佐である。

第三段階は、郭里集付近の戦闘が終了後の3月30日以降から4月6日、瀬谷支隊撤退までの8日間で、韓莊守備隊及び鉄道警備隊、臨城守備隊を除く瀬谷支隊の全兵力——歩兵約五個大隊、砲兵十二個中隊、機甲部隊三個中隊——合計兵員10,500名、火砲46門（歩兵聯隊の火砲を含まず）、戦車、装甲車約40輛が台児庄の戦場に投入された。支隊長瀬谷啓少將がみずから陣頭で作戦を指揮し、砲兵の統括者は、野戦重砲第一旅団長西村琢磨少將であった。

以上は、狭い意味における台児庄作戦の全体像である。他には4月1日から4月7日、第五師団坂本支隊（歩兵約四個大隊、砲兵二個大隊を基幹）の約人員6,000名余り、砲24門の部隊は、台児庄の東約10キロに離れた地域で、台児庄作戦に側面から策応しているが、作戦目的は台児庄の攻略ではなく、胡山、禹王山における中国軍後方への迂回攻撃であるので、本論においてこれを捨象する。

## 2. 2. 台児庄作戦の全過程概要

### 2. 2. 1. 台児庄派遣部隊の編成と増強

3月23日、嶧県から出発して台児庄に向かった「台児庄派遣部隊」は歩兵第六十三聯隊第二大隊（安永興八中佐）、混成聯隊砲中隊、野砲兵10A第二中隊（正中為雄中尉）、工兵半個小隊、旅団無線1基、衛生隊1/6（人員10名）、聯隊無線の有線班、対空班の一部の構成で、合計人員約1,500余名、馬約350匹。主な兵器は、41式75糎山砲2門、94式37糎速射砲2門、92式70糎歩兵砲2門、改造38式75糎野砲4門、92式重機関銃8挺、11年式軽機関銃24挺であった<sup>10</sup>。

25日に歩兵は第十中隊（永島朝好中尉）と歩兵砲一小隊、独立重機銃中隊の1/4、支那駐屯軍砲兵混成第六中隊（内野貞利大尉、96式十五糎榴弾砲2門、観測小隊、中隊段列及び大隊段列の一部、人員105名、牽引車、自動貨車数不詳）の増援をうけ、26日朝4時、さらに歩兵第二中隊（松原石人大尉、欠一小隊、人員154名）<sup>11</sup>と10A野砲兵第三中隊（山口芳男中尉、野砲4門）が追加派

<sup>10</sup> 算出法は混成第二大隊の数字+野砲兵第一大隊人馬数の1/2（一中隊は二日後の追加派遣なので除く）+無線分隊、工兵半小隊、衛生兵の数、あくまでも概数。「歩六三戦詳第一四号附表其十三」Ref.C11111253800、画像36/47 No.1105）。Ref.C11111252700、画像11/55 No.827（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）なお、RIAは聯隊砲（41式山砲）の軍隊符号で、TIAは聯隊速射砲（94式37糎砲）の軍隊符号である。1/2欠は半中隊、2門を意味する。

<sup>11</sup> Ref.C11111257400、No.908,940 歩兵第六十三連隊第二中隊陣中日誌

遣された<sup>12</sup>。この部分の増加兵力は、劉家湖を確保した後、主として第二大隊の「後方ノ掩護」に任された<sup>13</sup>。

以上を合計すると、3月26日時点で、台児庄派遣部隊には、歩兵六個中隊、砲兵三個中隊合計人員2,300余名、砲兵火砲10門、歩兵火砲8門、重機関銃14挺、軽機関銃36挺であった<sup>14</sup>。

## 2. 2. 2. 初戦

3月24日 ——城内突入失敗

安永興八中佐が指揮した台児庄派遣部隊は3月23日嶧県より出発して台棗鉄道に沿って南下し、泥溝、北営田にある敵の抵抗を排除し、日没後北洛（台児庄北西6キロ）に到達した。3月24日、東に迂回して台児庄城東北門外に到着し、13:20（13時20分、以後このように表記する）攻撃を開始するが、城内にいる敵の抵抗を受けたため、一旦攻撃を中止し、16:30後方裴庄南部落に配置を終えた野砲兵の支援を受け攻撃を再開した。

16:40大隊副官奥谷勤中尉が率いた第七中隊の十余名は東北門と小北門間の突出部の破壊口から城内突入したが、後続部隊が続かず、城内に閉じ込められ全滅した。この攻撃で、派遣部隊の損失は、人員死傷「約百名、馬十数頭」と報告され、弾薬も「全部射尽」したので、安永大隊長は福栄聯隊長に増援を求めた<sup>15</sup>。この時、台児庄にいる中国軍は、「少クモ五～六千装備優秀頑強ナリ」、と報告されている。

---

<sup>12</sup> Ref.C11111252800、画像13/51、22/51 No.884,893（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

<sup>13</sup> JACAR：Ref.C11111257400、No.915 歩兵第六十三連隊第二中隊陣中日誌

<sup>14</sup> 増援部隊編成はRef.C11111252700、No.846、No.868、No.893の記録より、人員、武器数字は人馬数は附表其十三、No.1105、編制表などにより算出。

<sup>15</sup> Ref.C11111252700、画像28/55、29-30/55 No.844,855-856（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

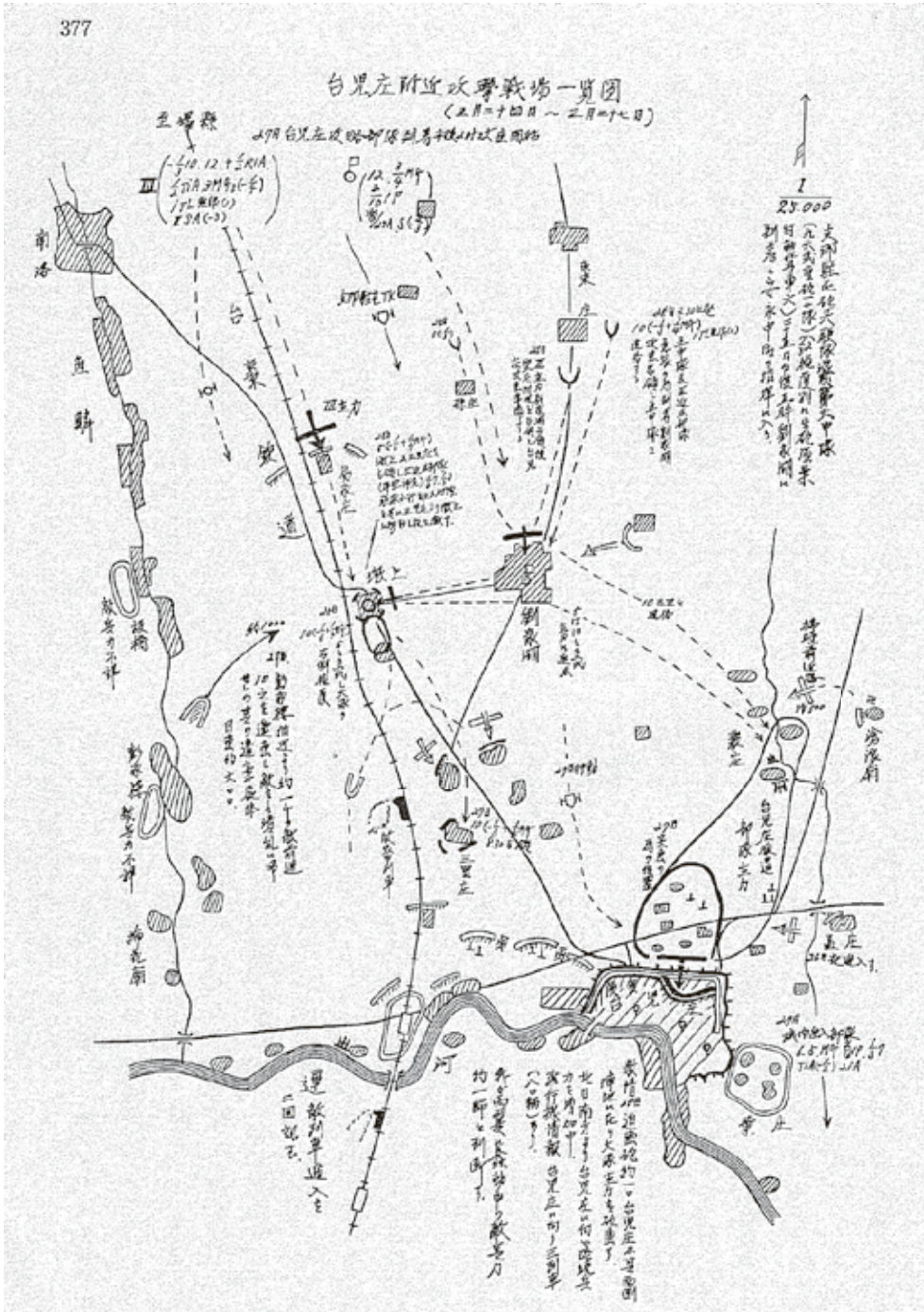


図 2 台兒庄附近攻勢戦要図 『歩兵第六十三聯隊史』 377頁より

緒戦失敗の後、第二大隊は、25日、26日両日に攻撃を組織せず、補給と増援を待ちながら、砲兵による城内の城防施設の破壊、圧制砲撃のみ行った。



### 2. 2. 3. 派遣部隊の第二回目攻撃

3月27日 ——城内突入成功

増援を受け、砲兵の攻撃能力が倍増した台児庄派遣部隊は、27日払暁、安永第二大隊長の指揮で第二回目の攻撃を開始した。05：50砲撃が始まり、7時ころ、第一線の第六中隊（伊藤敏雄中尉）を先頭に、攻撃隊は城北部の破壊口から一斉に城内になだれ込んだ。激戦のすえ、陣地を確保し「午前八時城頭日章旗ヲ掲クルニ至ル」<sup>16</sup>。しかし、その後の戦果拡張（城内掃蕩）はうまく行かず、市街地の陣地に拠る敵の「韌強」なる抵抗に加え、通信連絡の故障で砲兵の有効なる射撃支援が得られず、弾薬も次第に窮乏になってきたため、午前11時、城内清真寺の一部を確保したのち、戦線は膠着した。

またこの日、増援のため急行してきた台児庄攻略部隊の先頭部隊、支那駐屯軍臨時戦車中隊（大島俊夫大尉）が正午、城西北に到着し、第二大隊の城内掃蕩に協力しようとしたが、中国軍の対戦車砲に狙撃され大敗し、大島は戦死、戦力の大半を失った<sup>17</sup>。

夕方18：00、福栄聯隊長が率いる「台児庄攻略部隊」の主力が到着し、劉家湖に設営した。これで、台児庄における日本軍の砲兵部隊に新たに4年式15榴12門（三個中隊）が増やされ、合計火砲数22門（歩兵聯隊の砲兵を含まず）となった。他に歩兵も一個大隊（第三大隊、大村省吾中佐）、軽装甲車一個中隊（天羽重吉大尉、94式軽装甲車17輛）、支那駐屯軍の臨時戦車中隊（89式戦車7輛、軽装甲車5輛、但しこの時点ですでに戦力が喪失）が加わり、人員総数は5,507名（衛生隊、野戦病院の597名を含む）馬1,774匹になり、兵力が倍増した<sup>18</sup>。

### 2. 2. 4. 台児庄攻略部隊による第三回攻撃

3月28日——城西北角占領

28日払暁06：40、砲兵による援護射撃が開始し、福栄聯隊長の指揮で台児庄攻略部隊の総攻撃が始まった。城内第二大隊による戦果拡張と、城外西北角を攻める第三大隊の攻撃が同時に行われた。昨日新着した第三大隊の兵力を使って、東西両方向から城内の敵を挟み撃ちにし、一気に城内掃蕩を完遂するのが、福栄聯隊長の作戦計画であった。

しかし、07：00に始まった歩兵第三大隊の攻撃は、城西北角西方停車場側からの敵砲火、望楼よりの重機銃の射撃、および城外停車場東北方と台児庄城壁の間に連なる敵陣地からの頑強な抵抗に阻まれ、城壁に接近できず、一進一退で戦線は膠着し、無為のまま一日を空費した<sup>19</sup>。19：25、薄暮を利用して第十一中隊（村上則重中尉）はやっと城内に突入し、城壁西北角の一角を占領したが、

<sup>16</sup> Ref.C11111253400、画像 4/32 No.934。（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

<sup>17</sup> 「歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報」Ref.C11111253400 画像11-15/32 No.941-945.

<sup>18</sup> 「歩六三戦詳第一四号附表其十三」Ref.C11111253800、画像36/47 No.1105より算出。

<sup>19</sup> Ref.C11111253500、画像 6/36 No.968 （前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

敵の逆襲で死傷者が続出し、また次第に包囲され、城外との連絡も取れないまま孤立した<sup>20</sup>。

この日、城内における第二大隊の戦果拡張も殆ど進展しなかった。砲兵による支援射撃は敵の襲撃で妨害され、城内の歩兵の掃蕩も、市街地に築かれた堅固な陣地および敵の「頑強ヲ極メ」る抵抗に阻まれ、前に進めなかった<sup>21</sup>。中国軍は、城内市街地の地形を利用した頑強な抵抗と、城外での日本軍の砲兵陣地の襲撃、妨害によって、台兒庄攻略部隊の大規模な攻撃を有効に食い止めたのである。

## 2. 2. 5. 砲兵陣地の危機

3月29日

台兒庄攻略部隊による城内の掃蕩は3月29日も続けられたが、殆ど効果が上がらず苦戦が続いた。前日夜、城西北角に突入した第三大隊第十一中隊も、敵に近接する場所に地歩を得、陣地を固めた。城外への連絡路が封鎖され弾薬の補給もままならない状態であった。第二大隊の東第一線も、敵陣地内の迫撃砲、重軽機関銃の火力封鎖に悩まされ、「戦果拡張遅々トシテ進マス僅ニ前進シ得タルノミ」と報告されている<sup>22</sup>。

城外において、日本軍の各砲兵陣地が中国軍の襲撃にさらされ、防衛戦に終始し、城内への支援射撃がほとんど出来なかった。特に、威力の大きい支那駐屯軍砲兵混成第六中隊の96式15榴榴弾砲が狙われ、敵襲で死傷者が続出した。また午前11時頃、防衛戦のさなかで車列が砲撃を受け炎上し、「自動貨車六、牽引車一、乗用自動車一、弾薬車六、観測車一（観測器材ノ大部共）」が焼失し、大損害を受けた<sup>23</sup>。同戦闘詳報によると、この日支那駐屯軍混成中隊の人員105名の中、33名が死傷した<sup>24</sup>。

またこの日、郭里集附近の戦闘が終結し、瀬谷支隊の主力が郭里集と嶧県に集結し、午後、先遣隊となる支那駐屯軍独立野砲中隊（孤岡淳吉中尉、自動車牽引90式野砲4門）と歩兵第六十三聯隊第一大隊（中川廉少佐）が台兒庄に来援し、砲兵陣地の警備任務についた<sup>25</sup>。翌30日、瀬谷支隊本部、歩兵第十聯隊と野砲兵第十聯隊の主力も台兒庄に入った。

<sup>20</sup> Ref.C11111253500、画像 17-18/36 No979-980。（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

<sup>21</sup> Ref.C11111253500、画像 8/36 No970。（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

<sup>22</sup> Ref.C11111253500、28-30/36 No990-992（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

<sup>23</sup> Ref.C11111253500、画像 21/36 No983（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

<sup>24</sup> 「台兒庄附近ノ戦闘詳報」の記述（Ref.C11111730500.No1652-1654）から算出した。なお、3月25日より4月1日の統計表によれば、同中隊この期間の死傷数全体は43名（内死亡9名）であった（「附表第二号」Ref.C11111730800 画像2/6、No1676（前掲支那事変初期 北支における15榴部隊を中心とする砲兵戦史資料）。

<sup>25</sup> Ref.C11111253500、画像 32/36 No994（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

## 2. 2. 6. 支隊主力の到達と城内掃蕩の進展

3月30日

3月30日に、瀬谷支隊の主力は旅団本部とともに台児庄周辺に到着し、楊家廟（台児庄北9キロ）に設営した。歩兵は第十聯隊の二個大隊、砲兵は、野砲兵第十聯隊の五個中隊（第四、五、十一、十二中隊及び独立山砲中隊）、及び軽装甲車第十二中隊があらたに戦列に加わり<sup>26</sup>、この時点で、台児庄における日本軍の実力は、前に触れた最大時瀬谷支隊全体の数字——人員は10,417名、馬3,263匹、各種火砲78門、戦闘車輛46輛——に達した。指揮も、旅団長瀬谷啓の到着とともに、福栄聯隊長（台児庄攻略部隊長）から瀬谷に移し、砲兵の指揮官も、4月2日から台児庄入りの野戦重砲兵第一旅団長西村琢磨少将が担当した。

到達した支隊主力は30日、まず台棗鉄道以西、敵が集中した賈家口附近で陣地を占領し閻家口の敵を攻撃し<sup>27</sup>、南の運河線に進撃した。城外で猛威をふるう敵を駆逐して砲兵など後方支援部隊の安全を確保するための部署であった。前日に先着した支那駐屯軍90野砲中隊と中川大隊（歩兵第六十三聯隊第一大隊）も、同じように城外東北地区の砲兵陣地の警備に使われた。こうした対策は功を奏し、この日、有効な支援砲撃が復活した。午前十時、野戦重砲兵第二聯隊の連絡将校及観測将校も城内に入り、至近距離における適切な指示により、歩砲直協の作戦が行われ、東側戦線の攻撃に進展を見せた。日没までに、第二大隊の掃蕩は城内の南運河線まで達し、市街地の東半分を制圧したのである<sup>28</sup>。

一方、西北角を占領した第三大隊第十一中隊は、敵の執拗なる反撃でうまく戦線の推進が出来ず、逆に21:30逆襲を受け城壁の陣地を失った。ついに城外との連絡が絶たれ、完全に孤立し、4月1日、城内部隊の撤収と西北角陣地の放棄が余儀なくされた<sup>29</sup>。

## 2. 2. 7. 城外掃蕩の成功

3月31-4月3日

城内の戦いを順調に進めるため、瀬谷支隊長はまず城外における敵の脅威の除去に力を入れた。3月31日から4月3日まで、瀬谷は新着した歩、砲兵部隊を使って西から東へ、大規模な城外掃蕩を行った。敵の渡河増援を阻止するため、31日、まず台児庄西方、運河橋がかかるところの頓庄閘を占領して守備隊を置き<sup>30</sup>、その後主力を北方に迂回させ、台児庄の東、東北側から友軍の砲兵陣地を側背

<sup>26</sup> Ref.C11111171800、画像4/58 No1688 歩兵第十聯隊戦闘詳報 第13~14号 昭和12年8月~13年5月（防衛省防衛研究所）

<sup>27</sup> Ref.C11111171800、画像4/58 No1688（前掲歩兵第十聯隊戦闘詳報 第13~14号）

<sup>28</sup> Ref.C11111253600、画像8-9/43 No1006-1007（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）図面。

<sup>29</sup> Ref.C11111253600、画像34/43 No1032（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

<sup>30</sup> 「閻家口附近戦闘経過要図」Ref.C11111171800、画像24/58 No708（前掲歩兵第十聯隊戦闘詳報 第13~14号）参照。

後から包囲する敵（27D）の拠点に対して一連の掃討作戦を行った。参加した部隊は、歩兵三個大隊および砲兵五個中隊、そして戦車、装甲車部隊であった。歩兵第六十三聯隊第一大隊は、4月1日、敵二十七師の城外東北部の牙城彭村を激戦のすえ陥落させ<sup>31</sup>、同じ日、策応する第十聯隊、10A砲兵の主力も北方の馬庄（台児庄北東10キロ）、尋家庄から南へ前進し、低石橋（台児庄東北6キロ）を制圧した。4月2日、掃蕩部隊はさらに南下し、一路激戦して周（涛）溝橋、辺庄、孟庄一円を平定し<sup>32</sup>、4月3日、城東部郊外の葉庄を占領して城壁東側の脅威を除去し、続いて夕方、城東側運河線の拠点黄林庄を制し、東城壁を含む台児庄東部の地域を完全に制圧し、城外東側に蟠踞する中国軍（第二十七師）の脅威をほぼ絶ったと言える<sup>33</sup>。

## 2. 2. 8. 最後の攻撃

4月4日

4月4日午前8時30分、楊家廟の旅団司令部において瀬谷支隊長は「瀬支作命第72号」を下達し総攻撃を命じた。これは、実質上台児庄作戦における瀬谷支隊長の最後の攻撃になる。4月1日から三日に亘る外周の掃蕩作戦により、城外東北、東部における敵の直接の脅威を除去し、一時の小康を得たが、一方、中国軍第六師、第百三十九師、第二十七師、第百十一師の大部隊がさらに大きな輪をかけて東方の南から北へ（第五師団坂本支隊の戦闘地域）包囲網を形成し、一旦制した台棗鉄道西のエリアにも百十師の部隊が再び現出し、范口、頓庄閘を守備した第十聯隊の第二、第七中隊を孤立させた。また西方から敵の百二十四師も迂回して泥溝北の獐山、柳園に進出し、瀬谷支隊長の退路を断つ作戦部署を見せはじめた<sup>34</sup>。この危機が迫る緊迫情勢の中、瀬谷支隊長が自ら指揮した最後の攻撃が行われた。

計画は、かつて3月28日福榮聯隊長が部署した戦術と同様、城内第二大隊による戦果拡張と、城外第三大隊の「一部ヲ以テ台児庄西門及西北再ヲ占領シ敵ノ背後ヨリ新ニ掃蕩開始」という、東西挟み撃ちの作戦法であった。しかし、初戦から二週間が立ち、消耗の激しい第一線攻撃部隊にはもはや当初のような鋭気はなかった。西北城壁の再攻撃を命じられた第三大隊は、前回の失敗、撤収でこの地への再攻撃にトラウマになり、「熟考ノ結果」部署を変更し、突撃隊第十二中隊（澤山義治大尉）をして、外より城西北部からの再突入ではなく、城内で西方（敵の後方）に迂回する代替戦術をとらせた。もちろんこの退嬰の攻撃法は失敗に終わり、19：10からの攻撃は「中隊長以下多ク負傷シ大ナル戦果ヲ確得スルニ至ラス掃蕩ヲ中絶ス」。

<sup>31</sup> Ref.C11111253600、画像40/43 No.1038（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

<sup>32</sup> 「低石橋附近の戦闘」「辺庄附近の戦闘」の部分参照。Ref.C11111171800、歩兵第十聯隊戦闘詳報 第13～14号

<sup>33</sup> 「黄林庄附近の戦闘」Ref.C11111171900、No.1743-1755 歩兵第十聯隊戦闘詳報 第13～14号

<sup>34</sup> 台児庄附近彼我態勢要図 Ref.C11111253800、画像34-35/47 No. 1103-1104（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

10.1



図3 4月6日撤退する前の彼我態勢図 『歩兵第六十三聯隊史』421頁

また、歩砲直協の戦法にも問題が生じた。戦線膠着の現場では「緊密なる歩砲協同戦術」が採られ、友軍砲火による近接掩護射撃の僅かな隙間を利用して突撃を繰り返す戦法が行われたが、敵我の陣地の間わずか数十メートルであるため、友軍砲火による誤射は度々発生した。4月4日の戦闘で城内第一線の指揮者安永興八中佐は「友軍砲弾ニ依ル危害ノ兵員ニ及ホス精神的感作ノ大ナルヲ思ヒ砲兵ノ敵前線ニ近キ射撃ヲ希望セス」と福栄聯隊長に「具申」し<sup>35</sup>、受け入れられた。

<sup>35</sup> Ref.C11111253700、画像28/32 No.1069. 前線の臨時要請がある場合のみ、砲撃支援。

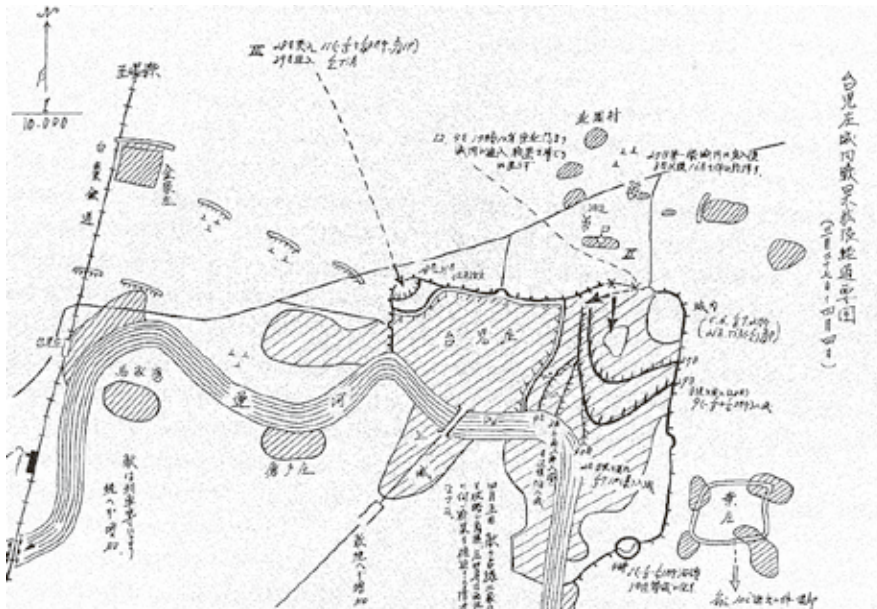


図4 台児庄城内攻略図 『歩兵第六十三聯隊史』405頁

この掩護近射中止の決断は、攻撃部隊にとって最後の有効な突撃手段をみずから放棄することを意味した。結局、この日の戦果は、「左翼運河々岸方面ニ於テ約八十米戦線ヲ西方ニ推進」したに過ぎなかった<sup>36</sup>。

## 2. 2. 9. 絶望と撤退

4月5～6日

台児庄の戦いは实质上4月4日の攻撃で終わり、瀬谷支隊長は、このままの戦力と戦法では、もはや台児庄の陥落は不可能であることを認識した。また敵に包囲された状況下で、台児庄の戦場にとどまることは、危険であることも熟知した。おりから5日、友軍の第五師団坂本支隊（台児庄東方約8-10キロの戦場にある）から「沂州反転」（撤退）の通報を受け、いっそう戦意が喪失し、これを機会に台児庄の“煩雑”から抜けだそうと瀬谷は考えはじめた<sup>37</sup>。そして、師団、軍から要請された坂本支隊を救援するための「一撃」作戦の計画を利用して、支隊全体を台児庄の戦場から撤収する計画を5日夜、徹夜で練り上げたのである。

6日、朝からの撤退部署に続いて、15：30、瀬谷は「瀬支作命七十八号」命令を秘密裏に下達し、日没後8時より、各部隊の台児庄戦場からの全面撤退を指示した<sup>38</sup>。この命令に従って、日暮れと

<sup>36</sup> Ref.C11111253700、画像27/32 No1068。（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

<sup>37</sup> 拙論「台児庄「反転」の経緯」第三節を参照。

<sup>38</sup> Ref.C11111253800、画像4-11/47 No1077-1084（前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報）

同時に城内外の歩兵、砲兵全員が隠密裏に戦場を離れ、撤退を始めたのである。なお、撤退途中、瀬谷支隊長は4月7日、第六十三聯隊の二個大隊と砲兵四個中隊を使って、坂本支隊の側背後を包囲している敵を排除する「一撃」作戦（底閣、楊楼附近の攻撃）を実行したが、敵の頑強な抵抗を受け期待した攻撃成果があがらず、7日日没後、再び隠密裏の戦場撤収が余儀なくされた<sup>39</sup>。第五師団の坂本支隊も、この作戦の後、4月7日深夜、台兒庄東部の戦場から瀬谷支隊と同じ方向の紅瓦屋屯（台兒庄北18キロ）に撤退したのである。この坂本支隊の撤退で、二週間にわたる日本軍の台兒庄作戦が幕を閉じたのである。

### 3. 瀬谷支隊の損失統計

#### 3. 1. 統計の方法

次に、台兒庄作戦の期間を中心に、第一期南部山東剿滅作戦全体を含め、瀬谷支隊、また第十師団の損失全容を見よう。

「大捷」の宣伝で「台兒庄大戦」の人気を保っている中国では、とりわけ大捷における日本軍の損失に高い関心を示すが、しかし、これに関して中国側による「拡大宣伝」の内容以外、確かな統計数字は一つもない。最近の研究によって「殲敵」11,984名の説が流行しているが、それも、中国側の統計によるものではなく、日本軍の統計資料の誤用に過ぎない。

一方、日本軍の史料には、台兒庄の戦いに関係する緻密な統計データが残されている。時期ごと、部隊ごと、戦闘ごとの人馬死傷統計や、目的別の軍医部統計、欠員数統計、補充人員統計、創傷種類統計などもあり、部隊の死傷だけでなく、武器の損失、弾薬の消耗までほぼ正確に把握できる。

人馬の損失に関して、方面軍、軍、師団の集結データが多く残されており、時期ごとの、各部隊の損失状況を精密に把握できるが、各具体的作戦、戦闘を還元しようとすれば、集結されるまでの原始データ、つまり各部隊の戦闘詳報類を利用しなければならない。この場合、一番把握しづらい数字は、砲兵など配属部隊のデータである。配属部隊は、作戦ごとに異動され、あるいは、実際使用されたが、配属命令がないため、戦闘詳報に計上されないケースもあり、記入漏れの現象は少なくない。この場合、軍隊区分（作戦目的の編成）の記録で、各部隊のリストから一々検証しなければならない。また、もし戦闘詳報が残されていないければ、そもそもこの類の精密検証も出来ない。

さいわい、瀬谷支隊の台兒庄作戦に関して、完璧な戦闘詳報の統計データが残されており、以下では、台兒庄の正面戦場における瀬谷支隊全体の損失を、二つの戦闘詳報の統計を元に、遺漏、ミ

<sup>39</sup> 「戦闘経過の概要 底閣、楊楼附近の攻撃」Ref.C11111253900、画像12/23 No1125、また1114以下を参照（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）。

スなどを修正しながら整理しておきたい<sup>40</sup>。

瀬谷支隊の主役は第六十三と第十の二つの歩兵聯隊であり、作戦中において、砲兵など各種配属部隊も歩兵聯隊長の指揮下におかれ（配属）、その死傷、消耗の統計も歩兵聯隊の戦闘詳報に反映される。第一期南部山東剿滅作戦の期間中（3月14日から4月7日）、歩兵第六十三聯隊の戦闘詳報には、六つの統計附表があり、直接台児庄の戦いを記録したのは、3月19日-4月6日の統計である。歩兵第十聯隊の戦闘詳報にも四つの統計があり、3月24-29日郭里集附近の戦闘と、3月30日から4月8日の台児庄附近の戦闘の統計は、台児庄作戦の期間に当たる。両聯隊の各データを合わせれば、瀬谷支隊全体の損失と消耗の数字が分る<sup>41</sup>。また、戦闘詳報の記録に、第二章に示したような全体部隊（軍隊区分）のリストもあるので、遺漏、ミスがあるかどうか、チェックできる。

台児庄作戦は、地域概念で区分するか、時間概念で区分するかで結果が違う。この研究において、時間の概念と作戦の完全性を考慮して3月20日から4月8日までの、瀬谷支隊の戦闘行為全体を台児庄作戦として計算した。そのため、場所がずれる歩兵第十聯隊を中心に行った郭里集付近の戦闘（3月24日-29日、台児庄北西35キロ）や、4月7日撤退後、歩兵第六十三聯隊が行った「底閣、楊楼附近の攻撃」、第十聯隊が撤退後4月8日に行った「高皇廟附近の戦闘」も、台児庄作戦の範囲内に入れた。

### 3. 2. 死傷者統計の一 人員死傷1,730名、馬死傷392匹

この数字は台児庄作戦に参加人馬の死傷数である。検証出来るように、計算式を示しておく。

#### a. 歩兵第十聯隊及び配属部隊作戦参加人馬と死傷統計（3月24日-4月8日）：

参加人員2,513名、馬356匹<sup>42</sup> 死亡人員106名 負傷262名 馬匹死傷15匹<sup>43</sup>

#### b. 歩兵第六十三聯隊及び配属部隊作戦参加人馬と死傷統計（3月19日-4月7日）：

<sup>40</sup> 「台児庄の戦い」は瀬谷支隊が中心となるが、坂本支隊の4月1日から4月7日までの救援も、その一部と見るべきである。残念なことはこの間、坂本支隊の統計データが残されておらず、その死傷数統計も、指揮系統の違いから、第五師団沂州方面の統計に計上されているはずなので、この一週間における坂本支隊の死傷計算は難しい。

<sup>41</sup> 配属部隊の臨時転換などの理由で、統計がすべて精確であるとはいえない。重複計算のミスを見ないが、記入漏れは確認できる。たとえば3月30日から4月6日の戦闘中、10A砲兵の五個中隊の記録は、該当期間の戦闘詳報から漏れている。また、4月6日-8日、長瀬支隊から歩兵第三十九聯隊の第一大隊（混成）も嶺山の戦闘に投入されたことは、戦闘詳報から確認できるが、死傷データはない。また兵站、輜重、野戦病院の死傷データも、戦闘詳報に反映されない。

<sup>42</sup> 人馬数は台児庄作戦期間（3.30-4.8）の数字を採っている（「戦闘詳報第13号附表」Ref.C11111172600 No.1846）。この期間歩兵第六十三聯隊も同時に参加しているため、両者への配属部隊の重複統計が避けられる。

<sup>43</sup> 修正データである。歩兵第十聯隊台児庄作戦期間（3.30-4.8）の統計データ（「戦闘詳報第十三号附表」Ref.C11111172600 No.1846）に、「郭里集附近の戦闘」（3.24-29）の損失（「戦闘詳報第十二号附表」Ref.C11111171000 No.1673）を加算した数字。



参加人員7,904名 馬2,907匹 死亡人員305名 負傷1,057名、馬死傷 377匹<sup>44</sup>

c. 両聯隊の合計 (a+b = 瀨谷支隊) :

参加人員10,417名、馬3,263匹。 人員死亡411名、負傷1,319名、馬死傷392匹。

合計人員死傷数1,730名、死傷率は 16.6%。 馬死傷数392匹、死傷率12%

d. 参考：攻城担当の歩兵第六十三聯隊のみの場合 (配属部隊を含まず) :

参加人員 3,294名、馬443匹 死亡人員196名 負傷人員690名 馬死傷124匹 死傷合計886名 死傷率26.8% 馬死傷率27.9%。

d.の計算は全体の統計より、高い死傷率を示す。一番被害を受けたのは、攻城担当の歩兵部隊であることが分かる。

### 3. 3. 死傷統計の二——人員死傷2,031名、馬死傷429匹

この数字は、南部山東剿滅作戦第一期 (3月14日-4月8日)における瀨谷支隊全体の死傷数である。南下作戦を開始した3月14日からの統計なので、香城、界河、滕県、南沙河、臨城、韓莊、嶧県、郭里集、台兒庄の各戦闘におけるすべての戦闘死傷数が含まれる。この計算法は、中国側の「台兒庄大捷」の計算法 (時間範囲) に一番近い。

参加人馬に関しては、期間中、両聯隊に配属部隊の組み換えが頻繁に行われたため、正確な算出は難しい。台兒庄作戦期間中の人員10,417名、馬3,263匹は参考の目安である。人馬死傷の計算法は次である。

a. 歩兵第十聯隊及び配属部隊の人馬死傷統計 (3月8日-4月8日) :

人員死亡129名 負傷402名 馬死傷16匹<sup>45</sup>

b. 歩兵第六十三聯隊及び配属部隊名の人馬死傷統計 (3月14日-4月7日) :

人員死亡346名 負傷1,154名 馬死傷413匹<sup>46</sup>

c. 合計 (a+b) 人員死亡475名 負傷1,556名 死傷合計2,031名 馬死傷429匹

<sup>44</sup> 修正データである。基礎データは歩兵第六十三聯隊戦闘詳報の (「歩六三戦詳第一四号附表其十三」 Ref.C11111253800、画像36/47 No1105)。修正要領は、一、記入漏れになった10A砲兵聯隊の五個中隊の数を、同附表第二十一の記載を参考して足した。二、支那駐屯軍野戦重砲中隊についての死傷者記入ミスを、「支那事変初期 北支における15榴部隊を中心とする砲兵戦史資料」の「附表第二号」 (Ref.C11111730800 画像2/6、No1676) を参考して訂正した。三、4月7日「底閣、楊楼附近の攻撃」の死傷データ (「附表第十七」 Ref.C11111253900 No1131) を基礎データに加算した。

<sup>45</sup> 計算法は第十聯隊の3.8-14間の統計「戦闘詳報第十号附表」 Ref.C11111170100 No1444、同3.15-18間の統計「戦闘詳報第十一号附表」 Ref.C11111170700 No1584、同3.24-29間の統計「戦闘詳報第十二号附表」 Ref.C11111171000 No1673、同3.30-4.8間の統計「戦闘詳報第十三号附表」 Ref.C11111172600 No1846 という四つの戦闘詳報附表の加算。

<sup>46</sup> 歩兵第六十三聯隊4.14-4.7までの統計表「第十四号附表其二十一」 Ref.C11111254400 No1155。

### 3. 4. 死傷統計の三——人員死傷2,582名（参考数字）

この数字は、第十師団司令部1939年3月20日調「各期戦闘ニ於ケル死傷表」から抜粋したもので、瀨谷支隊（第三十三旅団）ではなく、第十師団（二個旅団）3月3日より4月7日までの死傷統計の総数である。調査範囲は3月3日からなので、南部山東剿滅作戰第一期の期間よりやや広い。該当期間中第十師団の人員死亡は493名、負傷は2,089名、合計2,582名である。さらに内訳を見ると、第八旅団（長瀨支隊・濟寧西地域の掃蕩を担当）の死傷者136名、第三十三旅団（瀨谷支隊）の死傷者2,160（内死亡425）名、その他師団直属の砲兵聯隊、工兵聯隊、通信隊、衛生隊、野戦病院の死傷者合計数は284名となる<sup>47</sup>。

この統計には、戦闘詳報の統計に計上しなかった野戦病院、衛生隊、師団司令部、旅団司令部などのデータも含まれ、さらに戦闘死傷者以外の行方不明者、病死傷者、事故死傷者の数も含まれる。第十師団全体についての精確な損失統計であるが、戦闘目的の統計ではないので、師団以外の、軍直属の配属部隊の損害状況が分からない。

以上三つの数字の違いは、カバーする時空範囲から来たもので、実際の戦闘死傷数の統計違いを意味しない。統計の三からはじき出した瀨谷支隊の死傷2,160名は、統計二の2,031名の結果に非常に近いことは、日本軍の死傷統計の精確さを表す証拠である。

### 3. 5. 兵器の損失と鹵獲統計

#### 3. 5. 1. 兵器の損失<sup>48</sup>

- ・ 89式中戦車 4 輛（同搭載57耗砲 4 門・車載軽機関銃 10挺）
- ・ 94式軽装甲車 7 輛
- ・ 4 年式15糎榴弾砲 1 門
- ・ 94式37耗速射砲 1 門
- ・ 90式75耗自動車牽引式野砲 2 門
- ・ 92式重機関銃 2 挺 予備銃身 2 挺
- ・ 11年式軽機関銃 15挺 予備銃身 7 挺
- ・ 89式重擲弾筒 9 基
- 38式歩兵銃 118挺 38式騎銃 5 挺 14年式拳銃 22挺

<sup>47</sup> この数字は、期間統計で他の戦闘（界河、滕県、臨城、韓莊、郭里集、嶧県など）、または戦闘以外の死傷も含まれ、事後の師団全体の統計なので部署間の記録漏れはなく、精確度は高いが、師団以外の付属部隊を含まない。また、砲兵と工兵聯隊に関して、両支隊への分け方が把握しにくいので、便宜上全数を瀨谷支隊に入れた「磯谷兵団戦闘経過概要要図」附表、Ref.C11111031400。

<sup>48</sup> 歩兵第六十三聯隊の数は「歩兵第六十三聯隊台兒莊攻略戦闘詳報」〔附表第十六〕Ref.C11111253800.No1111より算出、歩兵第十聯隊の数は「歩第十聯隊戦闘詳報」〔第十三号附表〕Ref.C11111172600.No1848による。揭示数字は両者の加算。

### 3. 5. 2. 車輛損失<sup>49</sup>

機動車輛：・94式履帯牽引車 4輛 ・自動貨車 7輛 (内民間徴用車5を含む) ・砲兵観測車 1輛 乗用車 1輛 ・94式側車 2輛

非機動車輛：・96式野戦重砲弾薬車 6輛 ・4年式15糎榴弾砲弾薬車 1輛 ・39式輜重車 36輛

### 3. 5. 3. 戦闘消耗<sup>50</sup>

・小銃実包 495,232発 (38式実包、軽機関銃と通用) ・重機関銃実包 333,107発 ・89式重擲弾筒榴弾3,150発 ・手榴弾 1,764発

・92式歩兵砲 (70糎) 榴弾 3,689発 ・41式山砲 (75糎) 榴弾、霰弾 5,196発 ・94式37糎砲 (速射砲) 榴弾、徹甲弾 2,090発 ・57糎戦車砲榴弾 (支那駐屯軍臨時戦車隊) 440発

・91式野砲 (105糎) 弾 398発 ・38式野砲弾 (75糎) 6,472発 ・十五糎榴弾砲弾 (96式、4年式通用) 3,856発

### 3. 5. 4. 鹵獲<sup>51</sup>

・将校 1名 兵士 21名

・小銃 1,688挺 ・軽機関銃 75挺 重機関銃 7挺 ・重迫撃砲 3門

・小銃実包 152,840発 ・軽機関銃実包 22,180発 ・重機関銃実包 62箱+1,500発

・手榴弾 11,519発 ・迫撃砲弾 531発

### 3. 6. 小括合計 (戦闘詳報データ)

3月19日～4月8日、瀬谷支隊による台兒庄作戦中の各種データを概括すると

#### 3. 6. 1. 投入兵力

参加人員10,417名 馬3,263匹

投入各種火砲 75門 ・重機関銃 54挺 ・軽機関銃 112挺 ・重擲弾筒 112挺 ・戦車7輛

<sup>49</sup> 車輛損失は「歩六三戦詳第十四号附表其十六」JACAR：Ref.C11111253800.No1111、及び「附表第二号」Ref.C11111730800、画像2/6 No1676 (支那事变初期 北支における15榴部隊を中心とする砲兵戦史資料)、より算出。

<sup>50</sup> 歩兵第六十三聯隊について、「歩六三戦詳第十四号附表第十六」(3.19-4.6) (Ref.C11111253800. No1111) より算出、歩兵第十聯隊について「戦闘詳報第十三号附表」(3.30-4.8) (Ref.C1111172600. No1846) より算出。数字は両者の合算結果である、郭里集附近の戦闘の統計を含まない。

<sup>51</sup> 「歩六三戦詳第十四号附表其十五」(3.24-29) Ref.C11111253800.No1109「戦闘詳報第十二号附表」Ref.C1111171000.No1674、「歩兵第十聯隊戦闘詳報第13号附表」(3.30-4.8) Ref.C1111172600 No1849の加算。重要と思われる数字のみ。

・装甲車 39輛

### 3. 6. 2. 損失、消耗

人員損失：・死傷 1,730（内死亡411）名、死傷率は16.6%。 ・馬死傷 392匹 死傷率12%  
兵器損失：・各種火砲 4門 ・軽重機関銃 17挺、予備銃身 9挺 ・各種歩兵銃 145挺  
・戦車 4輛、装甲車 7輛 ・他の機動車 15輛 弾薬車、輜重車 43輛  
・消耗各種銃弾 88万発 各種砲弾 2万2,000発

#### おわりに

以上において、台兒庄における瀨谷支隊の作戦全容を見てきた。作戦は失敗して台兒庄から撤退したのは、間違いない事実であるが、統計数字と作戦内容を見れば、中国側が伝えたような惨敗ぶりではなかった。瀨谷支隊の死傷者数は1,730名であり、兵器損失も、火砲4門、戦車、装甲車車輛11輛に過ぎなかった。台兒庄東地域で苦戦した坂本支隊について、残された統計がないため様子を把握できないが、その馬力の半分（歩兵二大隊）にあたる歩兵第二十一聯隊の記録では、4月1日から7日まで台兒庄東地域（蘭陵、大顧棚、火石埠など）の戦闘死傷者は284（内死亡51）名であった<sup>52</sup>。つまり、推測になるが、つまりこの間坂本支隊の死傷者は6-700名前後であり、瀨谷支隊の数（1,730名）を足しても台兒庄地区の「大捷」における日本軍全体の死傷は2,500名を超えないはずである。

ちなみに、筆者が計算した、南部山東剿滅作戦第一期（＝台兒庄大戦（会戦））における日本軍の死傷者5,100-5,200名の数字は、2月17日から4月7日まで、長野支隊（第二十一聯隊の一部）、坂本支隊（第二十一旅団を基幹）による沂州作戦の死傷者数だけではなく、長瀨支隊（第十師団第八旅団、濟寧西地区掃蕩）、国崎支隊（第五師団第九旅団、膠濟鉄道、青島地区守備）の損害も含めた、第二軍二個師団全体の期間統計数字であった。第十師団の死傷数字は、本論に取り上げた2,582名であったので、第五師団の損失はほぼ同数であると推測する<sup>53</sup>。

<sup>52</sup> 岸本清之『濱田聯隊秘史』非売品、1987年、191頁。

<sup>53</sup> ほかに第二軍の死傷統計に、3月中旬から4月中旬の死傷データも有る。中旬の区切りで、本研究に役立たないが、第五師団の死傷数6,712名に対して、第十師団は6,770名ではほぼ同数であったことは、本研究の結果と一致する（「第二軍戦死傷表」Ref.C11111014300、No313）。